



中高生とともに差別と闘う

「まっすぐに、まっすぐに」

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



前号に続き、中学生集会の報告書について。

人権作文発表の二本目は、「想いを受け継いで」。

我がふるさとへの愛着を述べたあと、人権学習で学んだ丸岡忠雄さんの書いた詩「ふるさと」にふれて、「差別をなくしたい」という思いを強くしたと述べました。

「ふるさと」

*

丸岡 忠雄

ふるさとをかくす ことを父は

けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ

縊死した友がいた

ふるさとを告白し

許婚者に去られた友がいた

吾子よ

お前には

胸張ってふるさとを名のらせた

瞳をあげ 何のためらいもなく

これが私のふるさとです」と

名のらせた

*

この詩への思いを家族の団らんで話題に出したとき、発表者は祖父から意外な話を聞かれます。三十年前、この詩にメロディをつけ、歌っていたと。祖父は「ふるさと」をモチーフに自作した「二十五小節のふるさと」という曲を、ギター片手に歌いはじめます。聴き終わった発表者は、「祖父を誇らしく思うと同時に、僕にもきつと何かできることが

あると心から思いました」と述べました。

ふと思い浮かんだのは、自らのルーツを我が子に伝えるかどうか悩む、何人もの地区出身の教え子たちのごとくでした。

なんでもっと早く

昔の忘れられない出来事一つ。

私が地区担当教員の仕事をしてきたときのこと。卒業を控えたある日、当時まだあった地区対象高校奨学金の申請について教育委員会から問い合わせがありました。中学校が把握して作成した名簿にない家庭から、個人的に申請があつたと。電話を受けた私にとって、その男子生徒は、まったく寝耳に水の名前でした。奨学金の担当もしていたので、その家庭に電話をかけてお母さんから聞き取りをすると、ずっと前に隣町から引っ越してきた地区出身者だと言うのです。「ならば、どうしてもっと早く」という思いを押し殺して、自分の立場を子どもに知らせているのか尋ねました。すると、「言っていない」と。「奨学金の研修会もあるし、本人に知らせないまま受給させるわけにはいかない。むしろ、堂々と奨学金を受けさせてほしい」と言うので、「私からどう言えればいいか分からないから、先生から言ってくれないか」と。あきれはするものの、引っ越してきた先で、自分のルーツについて胸を開いて話すことの重さと思うと、一概にお母さんを責めることは

できませんでした。

少しやんちゃな彼に、後日話をしました。本人は何が何やら訳の分からない状態でしたが、自分なりに自らの立場を飲み込んで帰っていったように思いました。

卒業式も終わったある日。夜の職員室に一人っていると、彼がやってきました。職員室の出入り口で佇む彼は、いかにも話があるとしても言い足りない様子でした。「どうした」と訊くと、「奨学金のこと」と告げて、「なんでもっと早く言ってくれなかったのかと思う」と、母をなじるような言葉で話した。この数日、自分なりに考えて行き着いた思いであり、彼なりの結論だったのだと思います。それをどこかにつづけたかつたし、誰かに聞いてほしかったのだと思います。そんな彼の心情が、暗がりの廊下に滲んでいました。すぐさま私は返しました。「それは違う。たやすく言えることならとつとつに言ってる。そうじゃなかったから今まで言えなかったのではないか。それが差別の現実だ。母さんは母さんなりにずっと考え、悩んできた。母さんを責めるのはおかしい。それは絶対に違う」。そんな内容を彼に返したように思えます。職員室から射す明かりはわずかで、彼の表情はハッキリとは見えませんが、神妙に耳を傾けて聞いていたように思えます。隣には、日ごろから仲のいい、地区出身の友人が、そつとそばで見守ってくれて

いました。その関係性が、何より大きな救いでした。

まっすぐに、まっすぐに

子どもたちの眼はまっすぐです。嘘をついたりはぐらかしたり、隠しごとをしたり誤魔化したりすること嫌います。嫌悪します。そんな親であってほしくないかと祈るようになります。その期待を裏切るようなことがあれば、失望します。逆に、期待していたとおりの姿が見られれば、発表者のように祖父のことを誇らしく思えるし、尊敬もします。子どもたちにとって、自分が被差別の立場であるかどうかということも大きな問題なのでしょうが、それ以上に、身近な存在である家族がどう生きていくかが、より大きな問題なのだと思えます。

自らのルーツを伝えるかどうか。私は伝えた方がいいと思います。迷うのは、子どものことを信じ切れないから。子どもは親が思う以上にたくましく、まっすぐです。その眼に伝えられる生き方をしていられる限り、崩れることはありません。

「子は親の鏡」と言いますが、親がどう生きていけるかなのだと思えます。前向きな姿には共感するし、そんな生き方もできるんだと尊敬の眼差しを送ります。そして、自分もそうありたいと生きる希望を抱きます。子どもは親の姿を、親がどう生きていけるのかを見ているのだと思えます。

(次号に続く)